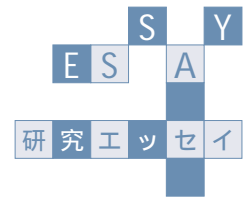




倭城・倭館・合戦図

文献史料との関わりをめぐって



三鬼 清一郎（神奈川大学大学院・教授）

1 はじめに

これまでの歴史学が文献史料（とくに古文書）を中核に据え、他の分野の研究成果を十分に吸収してこなかったことへの批判や反省から、新たな試みが始まっている。COEプログラムの「非文字資料の体系化」もその一つである。歴史学の側からみれば、このような成果を歴史の論理に組み入れ、文献史学の内容を豊かにしていくことが必要であろう。文字資料の重要性が認識され、それがもつ固有の役割が明確化されれば、たとえば、江戸時代の地方文書や地方書が描き出す世界が、民俗学や口承の研究に豊富な素材を提供していることも周知されていくと思われる。景観・環境の問題についても同様のことがいえよう。

2 歴史的景観をめぐって

名所・旧跡といった歴史的景観は、文芸作品に歌枕として登場するが、歴史研究の対象にはなりにくかった。その多くは、風光明媚な自然環境の中に寺社などの建造物が配置され、聖なる空間が形成されていた。それゆえ、人為的な手が加えられることなく保存されたといえよう。もちろん、自然災害による環境の変化がおこり、人間の生産活動で、たとえば新田開発の進展が影響を与えてきたことも事実である。人為的影響の最たるものは戦争で、15世紀後半から百年におよぶ戦国の争乱が、景観や環境に与えた影響は計り知れない。

戦争はまた、百姓・町人を生業の場から引き裂き、夫役の徴発に駆り立てた。鉄砲の伝来によって戦闘が集団形態となり、各地に城郭や城館が築かれた。大規模戦争を支える兵糧米は、さらに苛酷な年貢徴収を生み、村落構造にも深刻な打撃を与えている。それがピークに達するのは、16世紀末に豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役）であろう。

再度にわたって企てられた出兵は、前近代社会における殆ど唯一の対外侵略戦争であるが、舞台が外国にも広がり、マイナスの遺産は今日にも及んでいる。それを真

摯にうけとめ、研究に生かしていくことは我々の責務であるが、景観や環境といった非文字の世界を考える手がかりを残している。たとえば、倭城・倭館といった日本関係の建造物がそれにあたる。

倭城は、日本軍によって造られた城郭で、多くは朝鮮半島の南部に存在する。築城技術に長じた加藤清正などの武将が、自然環境の破壊を前提に築いたもので、当然ながら民衆の怨嗟の的になっている。しかし、最近では日韓の研究者による共同調査が行われ、史跡として保存される気運も高まり、縄張図の作成も進められている。

倭館は、室町時代に李氏朝鮮政府が、日本人の使節を接待するために設けた客館で、当初は三ヶ所あったが、のち釜山の一ヶ所だけとなった。朝鮮出兵の際には釜山城に包摂される形で消滅したが、国交が回復した江戸時代には復活し、対馬の宗氏を介する外交・貿易に中心的な場を提供していた。いわば、平和の時代に朝鮮の風土の中に築かれた建造物であるが、現存していない。

倭城・倭館ともに往時の姿を復元することは困難であるが、絵図などに手がかりが残されているので、それから探っていく必要がある。

3 合戦図の事例 「蔚山図」の紹介

ここに紹介するのは、「朝鮮蔚山合戦之図」という表題で前田育徳会尊経閣文庫（東京都目黒区）に架蔵されている淡色彩の一枚の絵図（69.5センチ×68.5センチ）である。秀吉の朝鮮再征にあたる慶長2年（1597）12月22日、浅野幸長が在番中の蔚山城に明・朝鮮の大軍が包囲した。この城は朝鮮半島の東南端（慶尚南道）に位置するが、近くにいた加藤清正らが急を聞いて入城し、毛利秀包も大軍を率いて救援に赴いた。戦闘は翌3年正月4日に包囲が解かれ終結したが、この絵図には、合戦の様子が時間の経過とともに記されている。

壕で囲まれた蔚山城の周辺には朱点が無数に記されているが、これは死骸の山である。朱丸は主だった武将が討ち取られた場所を示し、戦闘の激しさを物語っている。

墨で書かれた説明文は非常にリアルである。内容から判断して、筆者は加藤清正の家臣で、帰国直後に記憶を辿りながら記したとみられる。

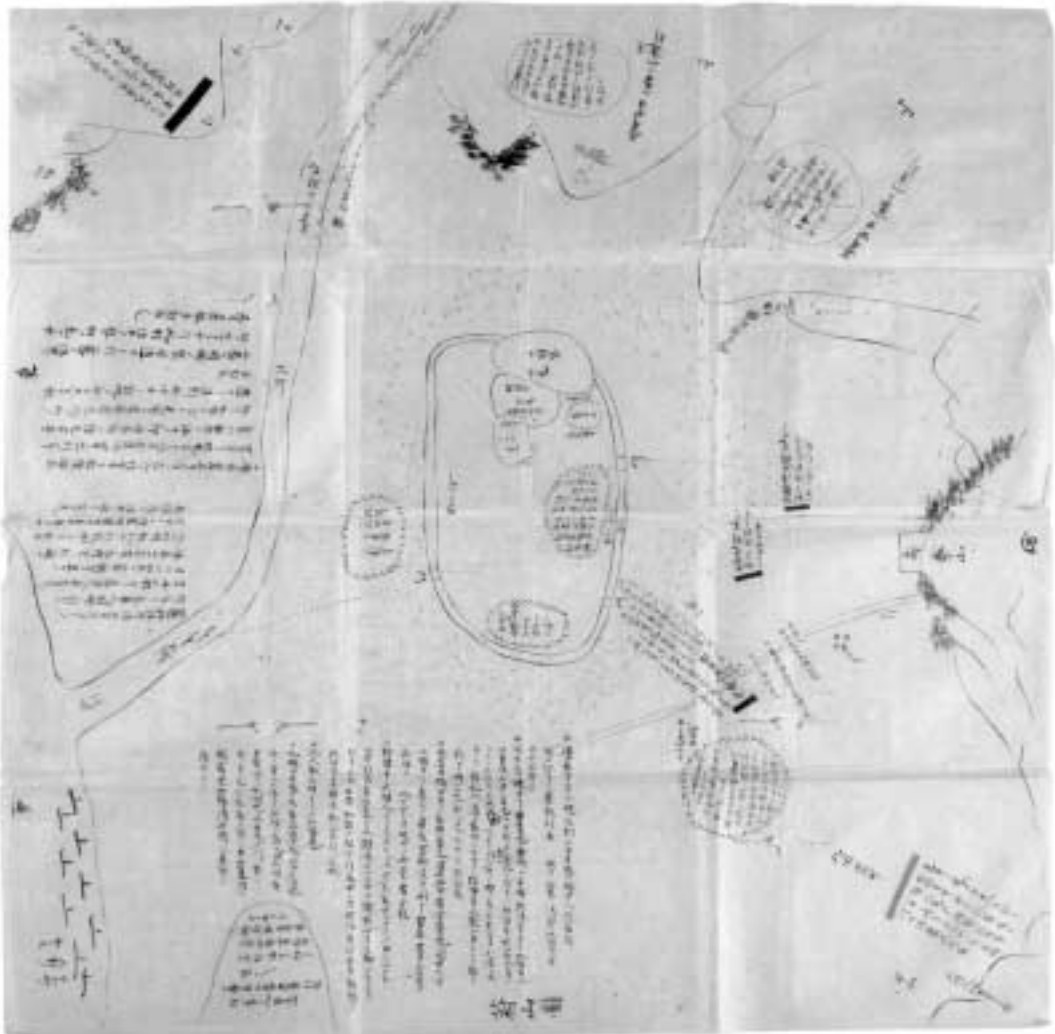
この城は日本勢が砦として築いたもので、山地にあるため石垣の高さは2、3間で通常より低いが、隅櫓の下は7間の高さであった。厳冬下での普請のため土手や堀も不完全で、攻撃を受けたとき防御ラインは弱かったようである。しかし、朝鮮半島の南部沿海を確保する戦略上の拠点で、熾烈な攻防戦が展開された。対陣は14日間におよび、城内の兵糧は尽き果て、荷物運搬用の牛馬までが食用に供されるほどであった。その間、明軍の側から和議の申し入れがあったが応じなかったという重要な内容も記されている。

絵図そのものはスケッチ風の略図ではあるが、蔚山城をとりまく四囲の状況が記されており、全体像を把握するのは都合がよい。軍勢の配置状況のほか、明・朝鮮

軍の進入路や、どの軍勢がどのルートで退却したかといった細かな点を知ることができる。また、大軍に包囲された城内に、なぜ加藤清正らが入ることが可能であったか、なぜその包囲が突如として解かれ、撤退が開始されたかといった事情を知る手がかりも残されている。

4 おわりに

朝鮮での合戦を含めて、戦闘の様様を描いた屏風絵は多く存在し、研究も盛んに行われている。この絵図は、通常の合戦図屏風とは趣を異にするが、他の史料と対照すると興味深い事実が浮かび上がってくる。それは、文字で記された内容が、他の合戦図屏風などを考察するうえでも重要な手がかりを与えてくれる点で、非文字資料の研究に果たすべき文字の役割の大きさが認識される次第であるが、詳細は紙幅の関係で別稿に譲りたい。



「朝鮮蔚山合戦之図」前田育徳会尊経閣文庫所蔵